

国立国語研究所学術情報リポジトリ

平成14年度日本語教育短期研修報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/1916

平成14年度日本語教育短期研修報告

『学習の多様性を探る—学習リソースの再検討—』

日時：平成14年6月15日(土)・16日(日)

場所：国立国語研究所講堂，第1研修室

参加人数：102名(15日)，36名(ワークショップ，16日)

「多様化」は、近年の日本語教育の重要なキーワードだが、実際に何がどう多様なのか、多様性は何によって生じるのか、多様であることにどう対応すべきなのかなど、「多様化」というキーワードを理解し、教育活動に生かすためには、学習の多様な実態を把握することが必要である。本研修では、学習者及び教師が人や物や情報など、身の回りのどのような素材を日本語学習のために利用しているかを、「学習リソース」という視点からとらえ、多様な学習の実態を探った。

【講演とディスカッション】(15日)

何が多様性を生み出すのか—第二言語習得に関わる諸要因をめぐって—(津田塾大学 林さと子)
リソースからとらえた学習の多様性(国立国語研究所 岡部真理子・下平菜穂・富谷玲子)

【ワークショップ】(16日)

第1部「事前課題のデータにもとづく検討」(グループA：学習者からみたりソース，グループB：リソースをデザインする教師)，第2部「リソースのデザインと利用」石井恵理子・岡部真理子・下平菜穂・富谷玲子

『対照研究の成果を日本語教育に活かすために』 (北海道大学留学生センターと共催)

日時：平成14年7月7日(日)

場所：北海道大学学術交流会館

参加人数：61名

言語の対照研究は外国語教育への応用を目的として出発したが、対照研究の成果は具体的にどのような点で日本語教育に役立つのか、また対照研究の成果を具体的にどのような形で日本語教育に活かすかという点については、まだ考えるべき点が数多く残されている。本研修では、対照研究の基本的な役割や、対照研究と日本語教育との関わりについてふりかえりながら、言語研究と言語教育の両方の視点から、対照研究

の成果を日本語教育に活かすための方策について考えた。

【講演】

日本語教師のための対照研究入門(国立国語研究所 井上優)，日本語教育と対照研究—回顧と展望—(東京女子大学 上野田鶴子)

【パネルディスカッション：対照研究は日本語教育にどこまで役立つのか】

報告1：誤用分析(広島大学 迫田久美子)，報告2：文法教育(北海道大学 小林ミナ)，報告3：音声教育(広島大学 松崎寛)

『日本語教育とコンピュータ：コンピュータによる自由作文の自動評価システム』

日時：平成14年12月7日(土)・8日(日)

場所：国立国語研究所講堂

参加人数：73名(7日)，50名(8日)

世界の様々な国々で、言語テストがコンピュータによって採点されるようになってきたが、学習者の自由作文をコンピュータで自動的に評価するシステムはいまだ開発途上にある。本研修では、自然言語処理や情報検索の研究分野の知見に基づき、米国ETS(Educational Testing Service)によって開発された英語の自由作文評価システムE-raterと、NECによって開発された日本語の自由作文処理システムSurvey analyzerを取り上げ、日本語教育における自由作文のコンピュータによる評価の可能性と問題点について考えた。

【講演とパネルディスカッション】(7日)

E-rater: An Automated System for Scoring Essays(フロリダ国際大学 Mark D. Shermis)
自由記述アンケートからのマイニングによるCRMの新しい形(NEC 森永聡)

コメント：村木英治(東北大学)，富田祐一(大東文化大学)

【ワークショップ】(8日)

『論理的文章作成能力の育成に向けて』

日時：平成14年12月21日(土)・22日(日)

場所：国立国語研究所講堂

参加人数：184名(21日)，102名(22日)

【講演と実践報告：論理的文章作成能力の育成に向けて】(21日)

昨今、「論理的文章を書く能力」が求められるようになり、教育の場においてもそうした能力を育成するための各種の試みがなされている。しかし、実際には、「論理(的)」という言葉自体、かなり曖昧に捉えられている。本研修では、「論理的である」ということをめぐる問題点を整理した上で、様々な立場から教育の試みについて話していただき、教育の中で「論理」を扱うために今後何が必要かを議論した。

講演：「論理的である」とはどういうことか(琉球大学 道田泰司)、実践報告1：留学生に対して(筑波大学 木戸光子)、実践報告2：一般日本人大学生に対して(早稲田大学 向後千春)、実践報告3：日本人年少者に対して(杉野服飾大学 奥泉香)

【研究発表会：作文教育改善のためのデータベース・ツール活用】(22日)

国立国語研究所では、日本語学習者に対する作文教育を改善するためのデータ収集・教育支援のためのツール作成を行っている。本研究会では、(1)XMLによる作文論理構造表示システム(論理構造XML)、(2)XMLによる添削情報表示システム(添削情報XML)、(3)日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース(作文対訳DB)の三つをめぐって、その教育現場での具体的な活用報告や、今後の発展の方向性に関する研究報告を行った。

第1部：「論理構造XML」の活用(研究発表3件)

第2部：「添削情報XML」の活用(研究発表2件)

第3部：「作文対訳DB」の応用(研究発表2件)

【学習の多様性を探る—学習リソースの再検討—】

日時：平成15年1月25日(土)・26日(日)

場所：九州大学国際ホール

参加人数：33名(25日)、9名(ワークショップ、26日)
(趣旨は平成14年6月15日(土)・16日(日)と同じ。)

【講演とディスカッション】(25日)

何が多様性を生み出すのか(大阪大学 浜田麻里)
リソースからとらえた学習の多様性(国立国語研究所 岡部真理子・下平菜穂・富谷玲子)

【ワークショップ】(26日)

第1部「学習者のリソース利用」

リソースの観点から見た海外派遣日本人教師の役割(元国際交流基金派遣専門家 今井武)、学習者のリソース利用—参与観察から見えること—(山梨外国人 인권ネットワーク・オアシス 齊藤祐美)、学習者のリソース利用—アンケート調査から見えること—(九州大学 和田玉己)

第2部「学習者を取り巻く環境とリソース・デザイン」

【地域における日本語学習支援—視聴覚教材利用の可能性—】(第6回視聴覚教材フォーラム)

日時：平成15年3月21日(金)・22日(土)・23日(日)

場所：国立国語研究所講堂、第1・3・4研修室

参加人数：72名(講演)、33名(ワークショップ)

近年、地域のボランティアなどによって運営される日本語教室が増加し、学校等に所属しない外国人でも日本語を学習する機会が持てるようになった。各教室では工夫をこらした様々な活動が行われているが、内容や方法に関しては、なお一層の充実が求められている。特に、視聴覚教材は必ずしも有効に取り入れられていない。しかし、テクノロジーの発達により、地域の日本語教室の多様性や学習者の流動性に応えられる教材やツールが作られ、視聴覚教材をはじめとするモノの役割とそれを用いるヒトの役割について再考する時期に来ている。

地域における日本語学習支援の今後を考える上で、視聴覚教材の果たす役割は大きい。本研修では、視聴覚教材利用の意義をあらためて検討し、地域での利用可能性について考えた。あわせて、地域における学習支援の今後の課題は何か、視聴覚教材を用いることはどのような学習支援につながるのか、などについても考えた。

【講演】(21日午前)

地域社会における言語的マイノリティー問題と日本語教育(大阪大学 山田泉)、外国語教育における視覚教材の利用：理論と実証データからの眺め(関西大学 竹内理)

【ワークショップ：映像教材を使った学習活動】(21日午後～23日)

足立祐子(新潟大学)、松岡洋子(岩手大学)、金田智子(国立国語研究所)

(記：井上)